

教職生活を通して学ぶ教員の課題の分析

Analysis of what issue in-service teachers learn from their teaching experiences

高 木 幸 子

本研究は、教員養成課程を経て教員となった後の教職生活の中で、どのような悩みや課題意識が生まれているのかを明らかにすることを目的とする。そのために2004～2019年に教員養成学部を卒業した33人を分析対象者として回答データをテキスト分析した。その結果、1. 教師になって悩んだことやつらかったことについては、経験の浅いうちは授業を作ることそのものを悩み自分の力量不足と感じ、経験を重ねることで、子供の多様な実態や家庭環境などに合わせた授業や対応が悩みとなっていた。2. 教職経験年数に関わらず教師は子供の良いところに目を向けていたが、その内容は、教師にとっての良さから、子供の成長や子供同士のかかわりの充実を良さとする方向への移行がうかがえた。3. 観察できる実態の理解や気づきから、子供の内面への気づきへの移行がうかがえた。

KEY WORD 教職経験, 悩みや課題, 質問紙調査, テキスト分析

1. 背景と問題の所在

教師を取り巻く状況は、厳しい状況である。少子化に伴う採用数の減少や教員になってからも、今般の感染症への対応が重なった学校のICT化の加速など、新たな対応が求められることが増えるばかりである。教員になってから休職する教員数は増加しており、精神性疾患で休職する教員の割合が増加しているという（佐野・蒲原2013）。その要因はさまざまであろうが教師として過ごす中で、子供や保護者、同僚などとの関係や授業実現に悩み続け対応に疲れてしまう教員も少なくない。

ベネッセ教育開発センター（2011）の調査によると、教師の悩みの上位として、「教材準備の時間が十分にとれない」、「作成しなければならぬ事務書類が多い」「教育行政が学校現場の状況を把握していない」「特別な支援を必要とする児童・生徒の対応が難しい」などが明らかにされている。また、落合（2009）は、教職という仕事は、児童生徒や同僚、保護者などの人間関係を中心に行われている仕事で

あるとし、ヒューマンサービス職の疲弊が、単なる多忙による疲弊ではなく、人としての根源的な問題、すなわち「主体性の喪失」と「孤独化」にあることが重大だと指摘する。平尾（2020）も、休職・離職経験のある教員を対象とした面接調査に基づき、教員が疲弊する要因が「子供と教員の心豊かな相互応答の欠如」「人間関係（対保護者・同僚・管理職）の構築の難しさと協働支援のなさ」「公を超えたサービスの個人化と説明責任の増大」「多忙」「責任の個人化」「多数からのまなごし」であると報告している。さらに、生徒との人間関係における中学校教師の悩みについて調査した都丸・庄司（2005）の研究からは、生徒への抵抗感、指導上の困難感、生徒からの非受容感、関わり不全感の4因子が説明されている。

このように、教師が教師として生きる上での課題や困難について多くの研究が進められてきている。教職のもつ資質・能力や構成する内容の関係について、今津（2012）は、教師の資質・能力を6層（「A勤務校での問題解決と、課題達成の技能」「B教科指導・生徒指導の知識・技能」「C学級・学校マネジメントの知識・技術」「D子ども・保護者・同僚

との対人関係力」「E授業観・子ども観・教育観の錬磨」「F教職自己成長に向けた探究心」に分けて捉え、その関係性を述べている。この捉え方によれば、Fの探究心は、AからEを支えるエネルギーの源泉であると位置づけている。また、B～Fが総合されてAが実現してこそ、資質・能力は意義あるものとなるとしている。その一方で、これまで一般的な資質・能力はB、Cが教職の専門性の核とされてきたことを確認した上で、協業が求められる教職だからこそAを実現するにはDが必要と整理している。今津が整理する資質・能力はどれも教職にとって重要な事項である。さらにこれらの資質・能力が、相互に関係する事を踏まえれば、教師の直面する課題や困難の個性に基づき、その関係性や比重の置き方（バランス）を検討することにより、より現実的な対処に近づくと考えられる。

このような中であるからこそ、本研究では、教職生活の中で直面する具体的な課題やその時の心情を、個別の事例として理解を深め、それらに共通する課題や困難に着目する。

2. 研究目的

本稿では、「教職生活を過ごす中で悩んだことやつらかったこと」および「学級運営（教科指導）などを含めての子供との関わりを通しての気づきや困難だと感じてきたこと」の内容に注目し、教職経験との関係や共通する課題の有無を明らかにすることを目的として分析・考察を進める。

2004～2019年に教員養成学部を卒業した62人の卒業生を対象に質問紙調査を行い、回答を得られた

40人のうち、調査段階で教職についていた際の回答を得られた33人の教員の回答データを対象として分析を行う。

これまで筆者が行った調査結果の分析・考察から、例えば、教職経験の長短に関係なく、子供の存在を大切に考えていた。また、記述内容から教員としての経験が浅い時期は、教師自身が必要な事柄を身に付けることに注力し、その後、教師としての経験を積む中で、子供の多様さの理解や個別の対応へと具体的な取り組みが広がることを読み取ることができた。さらに、教職経験の浅い時期は、子供の笑顔や子供とかかわることそのものを楽しみと感じ、その後、自身の取り組みが子供に届いていることに楽しさややりがいを感じているなど、教職経験を経る中で認識する内容や重視する点の違いについて報告してきた（高木2021）。

一方、教職生活を送る中で、どのように悩み、直面する課題を乗り越えてきたのかを知ることも、多様な教職生活の実態を理解する上では欠かせない情報である。また、教職経験年数との関連で考察することができれば、個別の違いを超えて共通する課題の有無について情報を得ることができる。このよう

表1 分析対象者（教員）の勤務内訳

グループの表記をGとした。(人)

教員経験校種	G I	G II	G III	計
小学校	4	8	8	20
中学校	5	2	1	8
高等学校			1	1
特別支援学校	1	1	1	3
幼稚園（こども園）			1	1
計	10	11	12	33

項目と質問内容

- A1: 現在、あなたが教師として大切にしていることは何か。
 A2: 教師になってから学んだと感じることにはどのようなことがあるか。
 A4-1: 教員生活で嬉しかったことにはどのようなことがあったか。
 A5: どのような時に楽しいと感じるか。また、なぜか。
 A3: 教師としてこれまでに最も悩んだことは何だったか。
 A4-2: つらかったことにはどのようなことがあったか。
 B1: あなたの学級や主に担当している教室の様子はどうか（良いと感じていることや気になっていること）。
 B2: 子供との関わりを通して気づいたこと。
 B3: 子供との対応で、一番難しいと感じること。
 C1: 最も力を入れている教科や取り組みは何か。
 C2: 指導・支援のために作成した教材があれば具体的に紹介してほしい。
 C3: 授業や指導・支援を行う中で難しいと感じることはどのようなことか。
 D1: 同僚との関係はどうか。関係作りで気を付けていることはどのようなことか。
 D2: 保護者との関係作りで大切にしていることや気を付けていることはどのようなことか。
 E: やりがいや課題、仕事を続ける上での要望や期待について。

図1 自由記述で回答する質問項目

な個別の違いと共通性が区別できるようになることで、支援のあり様についてもより具体的に考えることが可能となる。

3. 研究方法

3.1 分析対象者及び分析対象とする質問項目

本研究では、教員養成学部を卒業して教員になった卒業生の教職経験の長短により、教員という職業に関わる喜びや困難などに対する認識の違いや共通性に注目している。そこで、分析にあたっては、卒業後の年数によって3つの教職年数のグループに分けて比較検討した。それらは、卒業後5年以内の集団（以下、グループⅠと記す。）、卒業後6～11年の期間にある集団（以下、グループⅡと記す。）、卒業後11年以上の集団（以下、グループⅢと記す。）として質問紙調査で得られた回答を整理した。分析対象者は3グループを合わせて33人である（表1）。

質問紙調査に用いた質問項目は、全32項目である。本稿では、そのうちの「教師としてこれまでに最も悩んだことは何だったか（質問項目A3）」「つらかったことにはどのようなことがあったか（同A4-2）」「あなたの学級や主に担当している教室の子供はどうか（良いと感じていることや気になっていること）（同B1）」「子供との関わりを通して気づいたこと（同B2）」「子供との対応で、一番難しいと感じること（同B3）」の5項目の回答を対象として分析を行う（図1）。これら5項目は、教職生活を過ごす中で直面してきた困難の内容や乗り越えてきた事柄についての情報が含まれていると考える項目である。

3.2 調査結果の整理と分析

回収した調査回答データは、自由記述を入力してデータ化したうえで、「子供」と「こども」など同一の内容を示しているのに表記が異なるものについて、表記を統一するなどの基本処理を行う。また、教職経験年数の違いによる記述内容や特徴を見出すために、KH-coderを用いてテキスト分析を行う。

4. 結果と考察

4.1 教師として悩んだこと、つらかったこと

教職生活を過ごす過程で、教師は様々な課題や困難に直面する。どのような時期にどのような課題に

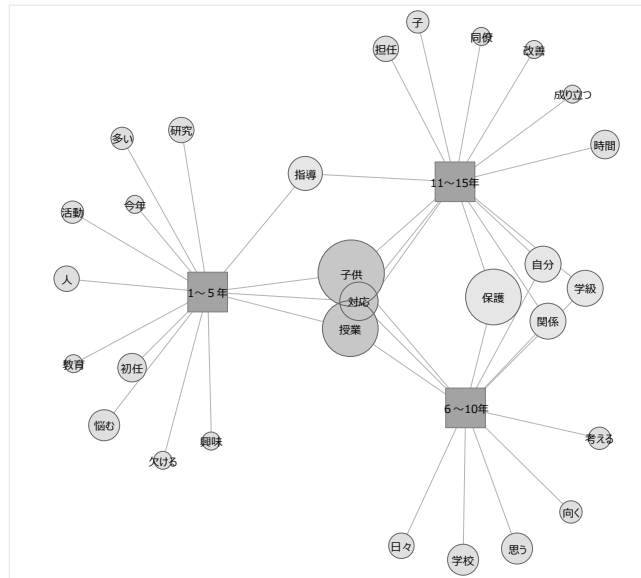


図2 A3,A4-2の記述を基にした共起ネットワーク

直面してきたのかを明らかにするために、質問項目のうち「教師になってからこれまでに最も悩んだこと（A3）」と「つらかったこと（A4-2）」の2項目に対する自由記述の回答データを基にテキスト分析した。A3, A4-2の質問項目に対する記述文は、総抽出語数1,765, 異なり語数423, 文93であった。テキスト分析は「経験年数」を外変数として、共起ネットワーク（最小語2, 上位40語）を作成した（図2）。その結果、3つのグループに関連の深い語として、「子供、対応、授業」が抽出された。そこで、KWICコンコーダンスにより、抽出語を含む文を確認し、経験年数による違いの有無や、違いがある場合は、どのように異なるのかを考察した。

教師になってから最も悩んだことやつらかったことについて抽出語を含む記述文を整理した（表2）。その結果、記述文は、「授業づくり」「子供への対応・関係づくり」「保護者対応」に分類された。

「授業づくり」に関わる記述文を確認すると、教職5年以内のグループⅠでは、「子供の実態に沿った授業構成」や「研究授業の準備」など、授業を行うことそのものに難しさや大変さを感じていることがうかがえた。グループⅡでは、教師自身がつくりたい授業をイメージできるようになっていることが読みとれるものの、その授業を実現できないという悩みや日常的に相談相手がいないことの悩みが記述されていた。さらには、取り組もうとする内容について同僚（管理職）から否定的な反応を受けること

表2 教師をしていてつらかったことにはどのようなことがあったか

項目	卒業後5年以内 (グループⅠ)	卒業後6～10年 (グループⅡ)	卒業後11年以上 (グループⅢ)
授業づくり	子供が楽しいと思える授業(学ぶ意欲が高まる授業)ができなかったこと/子供の実態に沿った授業構成、授業実践/研究授業/研究授業をするにあたっての準備が大変だったこと/教育に興味はわかず、それでも学校に行き、授業をしないといけなかったこと/	うまく授業ができず、追い込まれたこと/日々の授業が授業の体をなしていないこと/高学年を担当した時、教師主導の授業になってしまい、子供が主体的に発言する授業がなかなかできなかった時/初任者であったとき、授業の作り方が分からなかったこと/研究授業/校内に家庭科の授業について相談できる人がいないこと/子供のためにやりたいと考えたことも全て「面倒だから」と却下され、やりがいを見出せなかった/	
子供への対応・関係づくり	暴言や威圧的な態度など、攻撃的な子供への対応の仕方/生徒指導/集中力に欠けた子供が複数人いるクラスで、毎週授業をすることや子供が授業をつまらなそうにしている様子を見た時/	子供扱いは良くないと思いながらもどういう態度で接するのが良いかわからず、自分から壁を作っていたように思います/子供との関係づくりや接し方/学級経営で、子供の主体性を大切にしたいと思いつつも、子供たちの意欲や自律を促すためのかわり方に悩んだこと/子供がこちらの言うことを聞いてくれなかったこと/	授業が成り立たなくなった時期があったこと/子供同士の争いが絶えず、授業が成り立たなくなったこと/学級崩壊時の対応/初めて6年生を担任したときに、最高学年として卒業までどのように子供と接し、支えていけばよいか、日々悩んでいた/高1の担任をした時に、自分に自信がなく、周りは全部敵!みたいな子供との関係づくりで悩んだ/その子供と他の子供との関係/学校という組織、集団に適応できずに去っていった子供たちとのやり取り/生育環境のなかで、十分に愛着を築くことができずに至った子供たちに対峙する時/
保護者対応	保護者との対応/	子供のトラブルに双方の保護者を呼んで話し合いをし、連日その対応に時間を割かれたこと/学習参観で子供の発表を撮影している保護者がいた。保護者と同じ方向を向いて、子供の指導ができなかったこと/自分としては精一杯対応したつもりでも、保護者や子供には通じていなかった時/保護者との対応/	自分の中では精一杯、その子や保護者と向き合い、かかわっても、それが子供や保護者に伝わらず、何も変えることができなかったこと/保護者との対応(2)/

でやりがいを見出せなくなっている記述も認められた。

「子供への対応・関係づくり」については、教職経験年数の浅いグループⅠでは、「暴言や威圧的な態度など、攻撃的な子供への対応の仕方」や「集中力に欠けた子供が複数人いるクラスで、毎週授業を

することや子供が授業をつまらなそうにしている様子を見た時」等、教師としての自分の子供への対応が不十分であることに悩んでいることが記されていた。

グループⅡ、Ⅲの記述には、共に、子供との関係作りの難しさに起因する悩みが記述されていた。グ

グループⅡの記述には、子供とどのようにかかわればよいかわからないと感じていることや子供を理解するための関係づくりに悩んだことが記述されていた。

グループⅢも、グループⅡと同様に子供との関係づくりに難しさを感じている記述が認められたが、グループⅢでは、学校に適應できない子供や家庭環境の厳しい子供に対してどうすればよいかを思い悩む様子がうかがえた。教職経験を重ねる中で、目の前の子供の状況だけでなく、その子供の将来を案じることへと悩みの質が移行しているようにも捉えられた。難しいと感じる内容の変化は、子供に教えるという視点から子供を支えるという視点に移行したと考えることもでき、悩みがより複雑になったことがうかがえた。

「保護者対応」については、グループⅡとⅢには、「保護者と同じ方向を向いて、子供の指導ができなかったこと」や「自分としては精いっぱい対応したつもりでも、保護者や子供には通じていなかったこと」、グループⅢの記述には、「自身の取り組みが子供や保護者に伝わらず、何も変えることができなかったこと」がうらさとして記述されていた。

また、グループⅡのみに、トラブル対応に割かれる時間や保護者対応に費やす時間の多さが悩みとして書かれていた。

以上、教師になって悩んだことやつらかったことを分析して整理すると、教職経験年数の浅いうちは、授業を作ることそのものが悩みになっており、うまくいかないことを自分の力量不足と感じていた。しかし、教職経験を重ねるにつれ、子供の多様な実態や家庭環境の違いに基づく実態に合わせた授業のありようへの理解や対応が悩みの中心に位置づいていた。また、自身の行った取り組みが子供や保護者に伝わらなかったことの残念さが記述されており、自身の取り組みのねらい（意図）がより明確になっていることがうかがえた。

悩みやつらさの内容が変わる時期や経験は教師として子供への向き合い方や教師自身の考え方を精練する重要な経験になっている可能性がある。求められる授業ができないつらさから、子供を育てられていないつらさへとその内容は移行していることがうかがえ、それは教師としての成長とも考えられた。

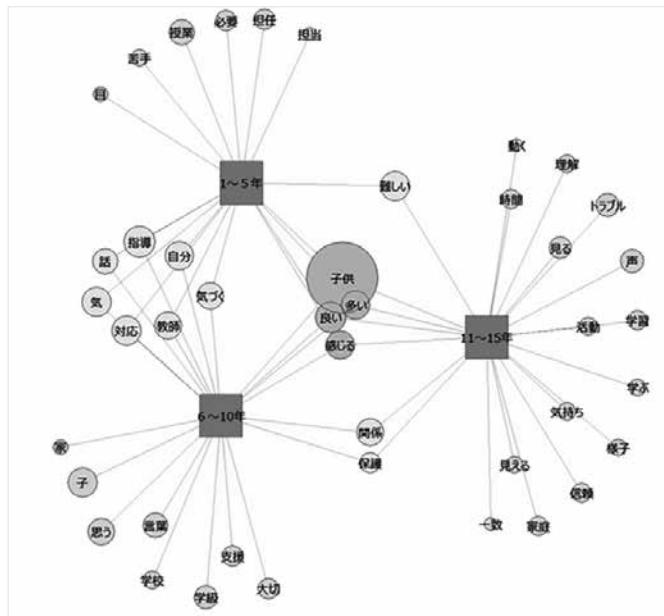


図3 B1, B2, B3の記述を基にした共起ネットワーク

4.2 教室の様子、子供とのかかわりからの気づき

B1, B2, B3の質問に対する回答データを基にテキスト分析した。質問項目に対する記述文は、総記述数4,146、異なり語数770、文204であった。分析は、「経験年数」を外部変数として、共起ネットワーク（最小語3、上位60語）を作成した（図3）。

その結果、3つのグループと関連の深い語として、「子供」「多い」「良い」「感じる」が抽出された。抽出された語は、KWICコンコダンスにより、その語が含まれる文を確認し、経験年数による違いの有無や、違いがある場合は、どのように異なるのかを考察した。

4.2.1 教室の様子でよいと感じていること、気になっていること

「子供」「多い」「良い」「感じる」の語を含む記述文を抽出し、記述文の意味内容によって良いと感じていること、気になっていることに区分した。

教室の様子でよいと感じていること、気になっていることに関する記述を意味内容で分類すると、良いと感じていることには子供に関する内容のみが記述され、気になっていることは、子供に関する内容と教師に関する内容の両方の記述が認められた（表3）。

「良いと感じていること」の記述内容を教職経験年数による3グループに区分して比較した。その結果、グループⅠでは、子供の様子に関しては「人の

表3 教室の様子でよいと感じていること、気になっていること

項目	卒業後5年以内 (グループI)	卒業後6～10年 (グループII)	卒業後11年以上 (グループIII)
良いと感じていること 子供	授業態度が良い／積極的な子供が多くみられること／教師の指導に対して素直に受け答える子供が多くいること／人の話を静かに聞き、一生懸命なところ／授業でも話を聞く場面と活動する場面で区別できる子供が多い／基本的には反応が良く、素直で優しい子供が多い／子供同士が気づいたことを伝え合ったり、声を掛け合ったりしながら、支え合って生活していること／男女が協力して取り組もうとしているところ／	挨拶ができること／静かに話を聞けること／友達のことが大好きな子供が多い／グループ化してなく、男女関係なく仲が良いこと／自主性があり、やってみたいこと、変えたほうが良いと思うことを提案しあったり、取り組んだりして試みることができるとてもかわいい子供たちと、のんびり過ごしていること／	1～6年生まで20名程度の子供がいる教室で、言葉によるやり取りができる子供が多いこと／声を掛け合って休み時間など遊んでいること／素直にやってみようとする／宿題等を丁寧にすること／人に優しくできる子供が多いこと／正面からぶつかってきてくれる感じが良い。／小学1年生なので、一つひとつ教えていますが、それを一生懸命やろうとすることが良いところ／
気になっていること 教師	気になっていることは、文章記述の際、「話し言葉を」用いる子供が多々見られること／明るい子供、元気な子供が多くいる一方で、授業前後や普段のあいさつの声が小さいことや発表や発言になると縮こまってしまうような子供が多いこと／	人との距離感、適切なかわり方がわからない子供が多いこと／同じ学校の以前に学級では、支援を必要とする子が多く大変だったこと／	子供たちが他校の子供に対してもつ劣等感／劣等感をもっている子供がいること／
	課題は、UDLに対応しきれていないこと（教室の狭さ、子供の数）／学力差、特別支援を必要とする子供への対応／	知的の特別支援学級だが情緒にも課題を抱えた子供の対応／	担任ではないため、子供理解の時間が短く、1教科でしか子供を見ることできないため、関係づくりが担任以上に難しいこと／

話を静かに聞く」「素直に受け答える」などの授業態度が良いことや、「子供同士が気づいたことを伝え合ったり、声を掛け合ったりしながら、支え合って生活していること」のように、子供同士のかわりの良さを記述していた。グループII、IIIでも、グループIと同様、挨拶ができることや素直であることが良さとして記述されていた。加えて、グループIIには「自主性があり、やってみたいこと、変えたほうが良いと思うことを提案しあったり、取り組んだりする」など子供が自ら行動する姿を良いと感じていた。さらにグループIIIの記述にも、「正面からぶつかってきてくれること」を良いと感じている記述が見られた。

また、子供の様子で気になっていることとしては、子供に対しては、グループIでは、「話し言葉を用いる子供が多くみられること」や「挨拶の声が小さいこと」、グループIIの記述は、「人との距離感やかわり方がわからない子供が見られること」、グルー

プIIIの記述には、「子供が感じている劣等感」について記述がみられた。

教師自身について気になっている記述も見られた。グループI、IIでは、特別な支援を要する子供への対応が十分ではないことが記述されていた。

良いと感じることについて、子供の良いところに目を向けている点では教職経験年数によって変わってはいないと考えられた。しかし、対教師の点から見ると、教職経験が浅いうちは、教師にとっての良さを記述し、その後、子供同士のかわりの充実をよしとする方向への移行がうかがえた。

4.2.2 子供とのかわりを通して気づいたこと

「子供」「多い」「良い」「感じる」の語を含む記述文を確認し、意味内容により分類した(表4)。

その結果、「子供についての気づき」「子供と教師の関係についての気づき」「教師自身についての気づき」に分類された(表4)。

「子供についての気づき」に注目すると、グルー

表4 子供とのかかわりを通して気づいたこと

項目	卒業後5年以内 (グループI)	卒業後6～10年 (グループII)	卒業後11年以上 (グループIII)
子供についての気づき	周りの子供がどのような考えをもっているかとても興味があるということ(書いた作文を班で回し読みする際、多くの子供が目いっぱい付箋に記述したこと)から) / どんな子供でも成長したい、よりよい自分になりたいと感じていること / 教師という立場で学校現場に入った時に、多種多様な子供が存在すること / 子供は集中できる時間が短いということ / 何か問題があった時、子供に指導しても家庭の理解が得られないと、なかなか改善に向かわないということ /	学校、家、それぞれの場で子供たちなりに気をつかい、頑張っていること(親や兄弟の事で悩みを話す子がいた) / 子供が学校で見せている表情は、子供の中の一面でしかないこと / 子供は思っていた以上に、教師とかかわりたいと思っていること /	子供たちは、様々な家庭環境の中で育ってきており、その環境や親とのかかわりが子供たちの行動に大きくかかわってくるということ。 / 教師の学ばせたい思いと、子供の学びたい思いが一致した時に、子供は自ら学び出そうと動き始めること /
子供と教師との関係についての気づき	教師が言ったささいなことも子供たちは良く覚えていること / 端的にわかりやすく伝える難しさ /	子供は教師の間間らしさを見ることで、より距離が縮まること / 教師の熱量は子供に届くということ / 教師が本気で思っていることは子供が敏感に感じ取ってくれる / 子供にとって"先生の一言!"が良い面でも悪い面でも影響が大きいこと / 「○○を頑張ろうか」といった歳、子供が○○を苦手だと思い込んでしまうこと / 伝えたいことは100のうち30も伝わっていないこと /	授業のねらいと子供たちが学びたい、やりたい、こうなりたいが、一致すると、参加型の授業になる / 授業内容の善し悪しもあるが、状況によっては、生徒指導的な側面が授業の質を高める要因として大きいこと /
教師自身に対する気づき	子供の些細な行動を見のなさに対応することの大切さ / 単なる欠席やトラブルと捉えずに、背景を考え、子供の悩みをしっかり取り除いてあげることが必要だと実感 / 教師は全ての子供に目を向ける必要があること /	子供の行動や言動の本当の意味を考えることの大切さ(問題行動の多い子が家庭で不安を抱えていたなど) / 子供の話をよく聞くこと / 指導場面で、状況を整理し子供の心情に寄り添いながら行うこと / 教えることも大切だが、育てること(ほめる、しかる、伝え合うなど)が大切 /	何よりも大事なものは、子供たちとの信頼関係(気持ちに共感した時の子供たちの表情や心、行動の変化を日々の教育活動の中で見て) / 信頼関係が築けていれば、どんなに厳しくても、子供は離れない(人権を大切にしたいうえで) / 自分が伝えていることが自分のための言葉であって、子供たちのために発した言葉ではなかったこと /

プIには、「周りの子供がどのような考えをもっているかとても興味があるということ」や「成長したい、よりよい自分になりたいと感じていること」など多様な子供の実態についての理解が記述されていた。グループIIには、「学校、家、それぞれの場で子供たちなりに気をつかい、頑張っていること」「子供が学校の中で見せている表情は、子供の中の一面

でしかないこと」など、子供の内面への気づきが表示されていた。グループIIIの記述には、「子供たちは、様々な家庭環境の中で育ってきており、その環境や親との関わりが子供たちの行動に大きくかかわってくるということ」など、家庭環境が子供の行動に影響していることや教師と子供の思いが一致することにより子供の成長を支えることになることが示され

表5 子供との対応で一番難しいと感じること

項目	卒業後5年以内 (グループⅠ)	卒業後6～10年 (グループⅡ)	卒業後11年以上 (グループⅢ)
子供への接し方、対応の仕方	子供と遊ぶ時間を作ること／子供が間違ってしまった時に指導をする際、粘り強い指導が必要だということ／何度も繰り返しの指導が大切なので、あきらめず、何度も話をしますが、なかなか身につかないこと／子供との相性／人に好き、苦手があるように、子供の方にも担任に対しての好きの感情や苦手意識があること／子供がした悪い行動などに私自身も苛立ち、感情に任せて叱ってしまうこと／	子供との関係づくりや接し方／教師と子供との関係を保ちながら仲良くなったり、信頼関係を築いたりすること／子供同士のトラブルで双方の主張が合わない時、どちらも悲しまずにトラブルを終わらせること／子供の気持ちが理解できて同情してしまうとき、うまく指導の言葉を書けること／子供扱いは良くないと思いつつもどういう態度で接するのが良いかわからず、自分から壁を作っていた／子供はすぐに変わらないので根気強く支援や指導していく必要があるのに、結果をすぐに求めてしまうこと／	子供を理解すること／子供の実態に合った支援を考えること／子供の本意を素直にくみ取り、学習に反映できるような問いかけ反応をしていくこと／子供同士のトラブル／反発する子供への指導／
支援を要する子供への対応	ひとり一人もっている特性が違うので、その子供にあった指導をすること(学習、生徒指導)／	個別の配慮が必要なとき、周囲の子供へどのように説明すれば納得したものとなるか、対応を瞬時に考えなければならぬこと／言葉の選び方によっては、配慮を要する子供本人を守れなくなってしまうこと／字が書けないなどの問題を抱えているが、要支援の認定がされていない子供への対応／	年齢が小さいと、自分の見え方を言葉で説明すること、また、検査も難しいので、こちらで想像し見極めること／学習への興味薄い子の気持ちを向けるための声掛け／癇癢を起こしやすい子供への対応方法／子供ひとり一人の見え方は、同じ障害であっても異なること／
保護者との関係		宿題をさぼりがちな子など、指導をする際、家庭とも連携を図りたいが、保護者が協力的でなく、子供の改善が見られないこと／子供への対応が保護者対応に等しいということ／子供から保護者に伝わる自分の評価を気にしながら子供に対応しなければならないこと／	子供の後ろには保護者がいて、子供が納得していても保護者はそうではないことも多いこと／スマホなど、メディアとのつながりが増えている中、正しい使い方をすれば便利だが、家庭でうまく管理されておらず、間違った使い方によってトラブルになるケースが多いこと／

ていた。

子供と教師との関係についての気づきには、どのグループの記述にも「教師が言ったささいなことも子供たちはよく覚えている」や「子供は教師の人間らしさを見ることで、より距離が縮まること」、「授業のねらいと子供たちの学びたい、やりたい、こうなりたいが一致すると、参加型の授業になる」など、教師の発言や行動(働きかけ)の重要性に気づいていた。

教師自身についての記述も認められた。グループⅠでは、「子供の些細な行動を見逃さずに対応する

ことの大切さ」や、「全ての子供に目を向ける必要があること」など、教師がなすべきことに注目している記述が多く認められた。グループⅡには、「子供の行動や言動の本当の意味を考えることの大切さ」や「子供の話を聞くことの大切さ」など、子供を受け入れることの大切さが記述されていた。さらに、グループⅢの記述には、「信頼関係が築けておれば、どんなに厳しくても、子供は離れない」など、教職経験で培われた教育観と思われる表現も見られた。

4.2.3 子供との対応で難しいと感じること

「子供」「多い」「良い」「感じる」の語を含む記述文を確認し、意味内容により「子供への接し方・対応の仕方」「支援を要する子供への対応」「保護者との関係」に3分類された。これらを教職経験年数の長短による3つのグループに分け、難しいと感じている内容に違いが見られるか否かを比較した(表5)。

「子供への接し方、対応の仕方」に関しては、全グループの記述に、「子供と遊ぶ時間をつくること」「子供との関係を創ること」「子供を理解すること」など、子供の理解に基づいて対応することの難しさが書かれていた。その一方で、グループⅠ、Ⅱには上述した難しさに直面する教師としての自分の力不足を感じている記述が確認された。

「支援を要する子供への対応」については、グループⅠには「子供の特性に合った指導」をすることの難しさが、グループⅡ、Ⅲには、特別な支援を要する子供への対応の難しさや、子供の指導にあたって保護者との関係を構築することや理解を得ることの難しさが記述されていた。

「保護者との関係」に関わっては、グループⅠに該当する記述はなく、グループⅡ、Ⅲには、「子供への対応が保護者対応に等しいということ」や「子供の後ろには保護者がいて、子供は納得していても保護者がそうではないこともあること」などの記述がみられた。教職経験年数が増えれば、家庭環境の複雑な子供を担任する機会も増える。多様な子供たちとさまざまに関わることで、子供への対応といえども、保護者対応と重なることを経験を通して理解していることがうかがえた。

5. 終わりに

本研究は、教師として過ごす中で、どのような悩みや課題意識が生まれているのかを明らかにすることを目的として、62人の卒業生を対象に質問紙調査を行い、回答を得られた40人のうち、調査段階で教職についていた際の回答を得られた33人の教員を分析対象として回答データの分析を行った。

その結果、教師の悩みや課題などについて、以下のように整理できる。

1. 教師になって悩んだことやつらかったことについては、教職年数の浅いうちは、授業をやることそのものが悩みとなり、自分の力量不足と感じている。教職経験を重ねるにつれ、子供の多様な実態や家庭環境などに合わせた授業への理解や対応が悩みの中

心に位置づいていた。

2. 教室の子供たちの様子について、教職経験年数に関わらず子供の良いところに目を向けていた。しかし、対教師の視点で見ると、教職経験が浅いうちは、教師にとっての良さを記述し、その後、子供の成長や子供同士のかかわりの充実を良さとする方向への移行がうかがえた

3. 子供と関わることによって、教職経験の浅いうちは観察できる範囲で多様な子供の実態の理解が図られており、その後、子供の内面への気づきへの移行がうかがえた。

なお、本調査では、自由記述文の意味内容の分類に際しては、文章の意味内容から分類を試みたが、参照枠を設定して分類してはならないこと、記述内容によっては複数の分類に当てはまると考えられるものは、筆者の判断で分類した。より分類の精度を高めるための複数の研究者での議論をして進めていきたい。

本研究は、基盤研究(C)「これからの教師の成長を支える要件の抽出」(課題番号20K02818)の助成を受けて行ったものである。

引用文献、参考文献

- ベネッセ教育研究開発センター(2011), ベネッセ第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版) <http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/sc_hon/>
- 平尾実美(2020)学校教員の疲労構造を探る: 離職経験者の語りからの一考察, 公教育システム研究, 19, 25 - 49
- 今津次郎(2012)『教師が育つ条件』, 岩波新書, 53 - 68
- 佐野秀樹, 蒲原千尋(2013) 教員ストレスに影響する要因の検討 - 学校教員の労働環境と意識 -, 東京学芸大学紀要総合教育科学系1, 64, 189 - 193
- 高木幸子(2021) 教職生活を通して得る教員の学びの分析, 新潟大学教育学部研究紀要第14巻第1号, 101 - 114
- 都丸けい子, 庄司一子(2005) 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究, 教育心理学研究, 53, 467 - 478